

会報

会報

東北大学法学部同窓会



東北大学法学部談話室

談話室は、法学部および法学研究科に所属する学生が休憩するため利用できる場所で、また、この談話室内には、学生ロッカーが設置されている。（右下写真はロッカー）

号
行
所
東北大学法学部同窓会
發行日
昭和56年6月30日
印 刷 所
大日本印刷東北事業部

法学部の近況について

会長 鈴木 祥

この会報の前号（五五年九月）をお届けして以降の人事移動としては、本年三月末に、英米法講座担当の望月礼二郎教授が、御家庭の御都合で、千葉大学法経学部に転出されました。教授は、昭和三五年に本学部に助教授として着任されて以来二〇年余、ほとんど本学部において成長された方といつてもよく、専門領域での多くの研究業績と学生の教育とに貢献されただけではなく、その間、学生部長として全東北大学のためにもめざましい活動をされました。他方、本年一〇月から、日本法制史担当助教授として、吉田正志氏が岩手大学から転入される予定です。同氏は、本学部と研究科との出身で、数年ぶりでいわば復帰されるので、今後の活躍が期待されます。人去り人来り、万物と同じく我が学部のスタッフも、序々に新陳代謝していくわけですね。

本年三月には、二五五名という例年より多数の卒業生が、さつそうと集まってゆきました。就職先は、公務員（公社・公團を含む）八四名、金融関係四七名、その他民間企業八八名、大学院進学七名といったところです。司法試験合格者も、一二名で、大体例年の通りですが、女性が増えていること（三名）は特記すべきでしょうか。

本年の新入学生むきの講演会は、名誉教授の先生方のお引受けがありませんでしたので、東大名誉教授で元最高裁判事でもあられる田中一郎先生にとくに御来仙を願い、四月一八日に「裁判と人権」という題で御講演をお願いいたしました。一番教室満員という盛会でした。

以上のはか、わが学部はまずは平穏で、とくに御報告すべきことはありません。そう言うと、あまりそつけないようですが、大学などという所は、本来、事がなくて時日が経過してゆけば、それで存在の目的が果されてゆくのだと思います。「便りのないのが良い便り」と理解していただいて、まずは御放念下さい。

仙台の古い思い出

(大学・友人・町のことなど)



東北大学名誉教授

勝本正晃

先般東北大學學報なるものを大學事務局から送つて頂き、今日の大學キヤンバスの着色鳥瞰写真が表紙に出た。

私の居たあたりを探した。拙宅は片平丁の控訴院前、広瀬川の断崖の上にあつた。その控訴院が見えて並んでいた、これも赤煉瓦の、理学部の研究室はどういつた。まさしく、滄桑の変である。

激変と云えば、昭和二十年終戦の年の初夏、快晴の日がとつぶり暮れ、聞きなれた空襲警報が、敵機數十、東北に向うというので、二階を閉めて名ばかりの防空壕にでも入るかと思つていると、突如、数百機と思わせる轟音、閃光と共に焼夷弾の雨。窓を開けば、仙台全市が火に包まれていた。あ

とで聞くと、先づガソリンを撒いたという。

師団司令部の青葉城門の見当を見ると、その後方の八木山のあたり、檜、杉、松の木立が悉くまつ赤に燃えている。

まさに地獄図である。工学部の原教授の宅からは、爆音と共に人が舞い上つたのが見えたという。それがまさしく、今日の大学キヤンバスそのものである。

悪夢の翌日、雲一つない晴天の下、私はカーキ色の国民服、脚絆姿で東一番丁のあたりを偶然と歩いて見た。一文館といふ、なじみの古本屋のあたり(一家全滅の由)、まだ焼残りが黒くすぼり、道路は粉微塵のガラス破片がギラギラと熱く、人影もまばらであった。

こんな所に誰も用はないのである。この九焼になる前の仙台に私が初めて来たのは、一九二三年九月の大震災後の大正十二年十二月である。

その九月、私は留学を終えて、ベルリンからロンドンに移り、少し遅在して、大西洋を渡り米国を廻つて、桑港から、其頃の日本の

豪華船大洋丸(大西洋を渡つたアキタニアから見てハシケの如く)で日本に帰つた。ドイツをたつとき東京の大震災の報を知つた。

ベルリンの新聞は第一面をほんと全部其記事で埋めた。江の島が陥没したとあって度肝をぬかれが、やがてロンドンに落付いて事情が追々わかつた。映画館のニュースで災害の有様を見たときは前席の英國のお婆さんが涙をぬぐっているのを見て、人事でないと

身につまされたが、帰るまでの家族の事情はわからず、横浜で船に迎えに来た弟によつてやつと分か

った。一月下旬付で、東北大學法文部教授の辞令が出て、鳩山先生に挨拶に伺うと、東大は丸焼、図書館、研究室も失つた。君が整理を手伝つたコートライ文庫も、昔のデルンブルヒの文庫も跡方もな

い。君は平穏な仙台で勉強ができるのは幸運だと慰めて下されたのには恐縮した。

大正十三年一月、早々妻子を引具して寒烈の仙台駅頭に立つたときは、万感がこみ上げた。其頃夕

片平丁の家からは十分位で行けた。正門に入る所右にはまだ二高の旧校舎が残り(其頃耐久年限内は

らずと片平丁を左へ向き大学正面を入つて右側にあり、後の私の

教授会が人選をも考慮することには多かった。電車ができたのは、ずっと後の話で、それも初めの頃は駅前から芭蕉の辻迄で、これが環状線になつたのは相当暇がかかつた。

その頃の法文学部は、控訴院からずと片平丁を左へ向き大学正面を入つて右側にあり、後の私の

教授会が人選をも考慮することには多かった。電車ができたのは、ずっと後の話で、それも初めの頃は駅前から芭蕉の辻迄で、これが環

状線になつたのは相当暇がかかつた。

その頃の法文学部は、控訴院からずと片平丁を左へ向き大学正面を入つて右側にあり、後の私の

教授会が人選をも考慮することには多かった。電車ができたのは、ずっと後の話で、それも初めの頃は駅前から芭蕉の辻迄で、これが環

状線になつたのは相当暇がかかつた。

法文学部として発足した當時は前述の如く佐藤さんが学部長であ

り、人選し、当局との交渉はこの方が當たられ追々教授が増せば、

医療の建物も使つて、取りあえず講義が始められた。私は解剖学に使つた、医学の階段教室を思出す。

その他の京大教授佐藤丑次郎博士(行政法、憲法)が学部長で、私

はまだ慣れないというので、週一回位の受持つてあつた。京大では

この佐藤さんと、佐々木惣一博士(憲法)か、京大出身の最初の京

次大戰後の好況により、日本郵船

豪華船大洋丸(大西洋を渡つたアキタニアから見てハシケの如く)

つた)で日本に帰つた。ドイツをたつとき東京の大震災の報を知つた。

ユースで災害の有様を見たときは前席の英國のお婆さんが涙をぬぐ

っているのを見て、人事でないと

身につまされたが、帰るまでの家

族の事情はわからず、横浜で船に

迎えに来た弟によつてやつと分か

った。一月下旬付で、東北大學法

文部教授の辞令が出て、鳩山先

生に挨拶に伺うと、東大は丸焼、

図書館、研究室も失つた。君が整

理を手伝つたコートライ文庫も、昔

のデルンブルヒの文庫も跡方もな

い。君は平穏な仙台で勉強ができ

るのは幸運だと慰めて下されたの

には恐縮した。

大正十三年一月、早々妻子を引

具して寒烈の仙台駅頭に立つたと

ころ、万感がこみ上げた。其頃夕

片平丁の家からは十分位で行けた。

正門に入る所右にはまだ二高の旧

校舎が残り(其頃耐久年限内は

らずと片平丁を左へ向き大学正

門を入つて右側にあり、後の私の

教授会が人選をも考慮することには多かった。電車ができたのは、ずっと後の話で、それも初めの頃は駅前から芭蕉の辻迄で、これが環

状線になつたのは相当暇がかかつた。

法文学部として発足した當時は前述の如く佐藤さんが学部長であ

り、人選し、当局との交渉はこの

方が當たられ追々教授が増せば、

医療の建物も使つて、取りあえず講義が始められた。私は解剖学に使つた、医学の階段教室を思出す。

その他の京大教授佐藤丑次郎博士(行政法、憲法)が学部長で、私

はまだ慣れないというので、週一

回位の受持つてあつた。京大では

この佐藤さんと、佐々木惣一博士(憲法)か、京大出身の最初の京

次大戰後の好況により、日本郵船

会 報

東海支部

水谷厚生

めて感謝申上げる次第である。それにつけても移動の激しさ、一年間に約二百名が転勤転居され、追跡が間に合わず、その点を補完する意味から、本部・支部の隔年発行の甘い囁き合せが必要と思われる所以ある。お互異動報告を励行されるよう望みます。

(東京支部会事務局長)

会計 笹原幸夫
当支部の運営に関する事項として、「旧法文学部卒業者は当支部懇親会に出席することができる」とすることの可否が審議され、これを可とする決議がなされました。

出席予定者は三四名であります。

たが、内七名に突発的な支障が生じ出席できず、出席者は菅谷知已

(昭三年卒)、北村利彌、中山俊一

(以上昭九年卒)、堀貞治(昭〇八年卒)、高橋宏一(昭一一四年卒)、安藤武四郎、伊藤乾二、辻孝(以上昭一二年卒)、伊東富士丸、大矢圭一(以上昭一四年卒)、高橋正蔵(昭一七年卒)、八島行康(昭一八年卒)、池田光(昭一九年卒)、加藤信彦(昭五四年卒)の各氏でした。

出席率は当支部会員数の約二割程度で、先年(二九名)と同程度でした。若い人の出席率は今年も良くはありませんでしたが、少しづつ増える傾向にあると思われます。

写真を撮りましたので同封します。

長谷川伴夫(昭一九年卒)、池田光

(昭三年卒)、谷口隆(昭二七年卒)、武田

健(昭二九年卒)、森郷己(昭三〇八年卒)、篠進(昭三一年卒)、向田文

(昭三六年卒)、水谷厚生(昭三六年卒)、佐竹英博(昭三八年卒)、永浦邦彦(昭三九年卒)、谷川輝彦(昭四〇八年卒)、山野元(昭五二二年卒)、中山信義(昭五三年卒)、加藤

信彦(昭五四年卒)の各氏でした。

出席率は当支部会員数の約二割程度で、先年(二九名)と同程度でした。若い人の出席率は今年も良くありませんでしたが、少しづつ増える傾向にあると思われます。

写真を撮りましたので同封します。

北海道支部 佐々木浩

(北海道支部書記)

北海道支部の近況について

札幌では例年通り五月十日頃に桜が見られましたが、その後は肌寒い風の吹く日が多く、五月下旬

の「ライラック祭り」が過ぎて漸く新緑の初夏を迎えたところです。

北海道には同窓生諸兄が約一四〇名おられ、道内各地で活躍されております。札幌市とその近郊に

○名おられ、道内各地で活躍されております。札幌市とその近郊に

九五名、室蘭・苫小牧・小樽・函館・釧路・旭川の各市に五七名、その他市町に六名と名簿が整理されております。

支部長に斎藤忠雄(昭4弁護士)

幹事役に齊藤昭三朗(28団体役員)

鈴木敏之(31道庁)、富岡公治(40弁護士)、が当り、年に少なくとも

一回は定例会をもつますが、「村曜会」も年二回の楽しい会合を行ってい

支部長に斎藤忠雄(昭4弁護士)

幹事役に斎藤昭三朗(28団体役員)

鈴木敏之(31道庁)、富岡公治(40弁護士)、が当り、年に少なくとも

一回は定例会をもつますが、「村曜会」も年二回の楽しい会合を行ってい

宮城支部

東海林恒英

当宮城支部は母校のお膝元であるところから設置が遅く、ようやく昭和五十三年暮に設立総会が開

ます。今回は北海道大学法学部におられる同窓生を紹介しますと、山畠正男教授(22政治学)を筆頭に、

杉原高嶺(41修、国際法)の諸先生が研究と講義にそれぞれ活躍され

ております。

更に法学部同窓会に関連して特に知らせたいのは、全学部同窓会で構成されている「東北大

同窓会連合会」の動きが盛んなこ

とであり、齊藤忠雄支部長が連合

会会長に、顧問には政務次官など

國政上極要な立場で働いておられ

る中村啓一参議(21法律)が推挙さ

れているほか、前記の鈴木、富岡

の両氏が常任幹事に指名されています。

年一回の総会(昨55年は11月26日学長代理出席)に全学部

から多數出席されて盛況を極めま

すが、例え青葉工業会の会合に

他学部有志が出席させて戴いたり、

全学ゴルフコンペ(2年目で本年

第一回は去る5月19日開催)を開

催するなど、他学部同窓会との交

流が見られ、法学部同窓会も連合

会融和の中心となつております。

以上は近況の一端ですが、来道

等の際には連絡を密にされて、そ

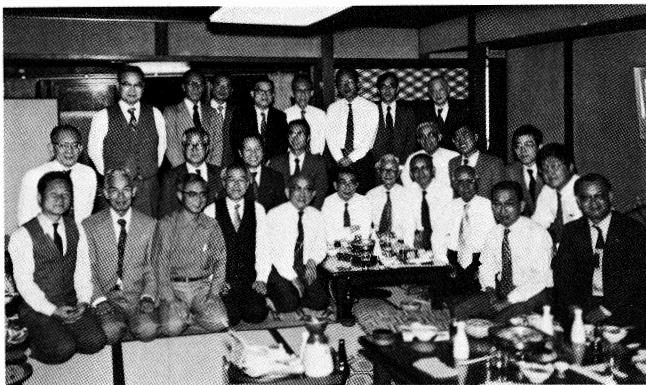
れぞれ親睦を深めることができ

れば幸いです。(北海道支部幹事)

(写真 マイクを持つ元気な高柳先生と、掛っている鈴木会長)



理事 伊藤潔 逢地春雄
安藤武四郎 辻孝
伊東富士丸 杉田
邦保 高橋正蔵 小森治
八島行康 池田光男 等
監事 菅谷知已 大矢圭
幹事長 高橋正蔵 一
書記 水谷厚生





卒業三〇周年懇親会

(昭和一十五年卒業)

晉原 菊書

は名簿の発行が難しくなるとの報告があつた。総会に引き続く懇親会では高柳先生の懐い思い出話に耳を傾けたり魅力ある会を目指し、会員の出席を促そうとの挨拶があり万歳三唱で懇親会の幕を閉じた。

昭和五十五年十一月十三日(木)
午後六時から、東京の銀座本州
ル地下「さむら」で、私たち昭
二十二年入学乃至昭和二十五年
業の同級会が卒業後初めて懇親
を開いた。短期間の準備にもか
わらず総員七十六名(亡くなつ
方三名)のうち二十八名の諸兄
出席してくれた。他に出席予定
として佐藤隆夫、長峰忠治郎両
始め数名いたが、急な公用のた
め欠席の電話があつたのは残
だつた。しかし同級会としては

え
空腹をこらえながらそれでも
新しい日本の将来への夢と希望で
けは胸一杯にふくらませ、小町谷
勝本、中川、木村、清宮その他の
諸先生の名講義に目を輝かせて聴
き入ったものである。今はただ懐
しい思い出である。
出席した諸兄には卒業（なかに
は入学？）以来始めて会つたとい
う人もいる。卒業後三〇年の航跡
がすべての顔に刻み込まれている。
しかしつしか三〇年前の若々
い顔に見えてくるのも不思議だ。
記念写真に遅刻した菅野杉郎、小

思えば私たちが入学したのは敗戦後間もない昭和十二年の四月だった。片平丁のキヤンバスは桜の電車がふくらみかけていたが、戦災の焼跡に教室は法文学部（法・経・文）全体で三つが残っているだけだった。その年の入学者には復員軍人、外地からの引揚者も少なくなく、大正五年生まれから昭和三年生まれまで年令差はかなりあった。おまけに旧制高校・専門学校の新卒者のほか、陸軍少佐、海軍技術士官、満洲国警察署長、医学博士、バイロットなど、その学歴も職歴もさまざまであった。真冬でも火鉢

前沢、野口、
坂野上、渡辺、松木、平野、真柳、藤永、
篠、菱沼

松島の一夜

—三十年卒同級会—

小山 玲子（旧姓 大森）

会は黙禱で始まつた。その、二分という時間が、宇宙の何処かに在るといわれるブラックホールのように思えた。二十五年の歳月は見る見る吸い込まれて行つた。——

伊沢、石崎、木村、小町谷、津曲、中川……諸先生の壇上のお姿が次々に浮かび、そして消えた。五年前の音のように通り過ぎた。卒業二十周年のクラス会には元気

に出席していたU君も……」一瞬
言いよどんだ司会者の声が、まだ
耳にのこつていた。一九八〇・八、
二三・土曜日、松島——海の闇は
濃く、天空には星座がつらなつて
いた。
黙禱が終る。

ホテル大観荘大広間に、ざわめ
きとぬくもりがもどる。

高柳、世良、加藤、三先生を迎
え、女性三人も交え、居並ぶは四
十七人。それぞれに、仕事ざかり
男ざかり女ざかり、なのであつた。
天下国家から子供の受験、庭木の
手入れ、釣り、ゴルフ、囲碁、食
べものの嗜好、女……。過去のあ

別れがたかつた。明け方近くまであちらこちらの部屋を訪ね合つた。廊下を、幾人か、音もなく行き交うもののけはいがあつた——。手もとに、今、四枚の写真がある。昭和三十年春の卒業写真、三十一年夏の東京、五十年八月、仙台。そして、五十五年八月の松島。五年後——一九八五・夏。その一枚の写真に、ひとりとして欠けることなく顔をそろえて写されていて、とふと思う。「それまで、ケツバツテ、元氣でなあ」訝りのつよい酔つた声で、誰彼なく肩を叩いてまわっていた大きな手のぬくもりは、誰のものであつたか。



前
新
野口
酒屋
喜
介、
（後列）小野寺、戸崎、伊藤
坂野上、渡辺
松木、平野、真柳
藤木

前沢、野口、嘉蔵、菅原榮、五十嵐、鉢巻
佼、笠原、(後列)小野寺、戸崎、伊藤楨、藤水、
坂野上、渡辺、松木、平野、真柳、藤水、
築、菱沼

松島の一夜

小山玲子
(旧姓大森)

会は黒福で始まつた。その力という時間が、宇宙の何処か

ようと思えた。二十五年の歳月

伊沢、石崎、木村、小町谷、

が次々に浮かび、そして消えた

千葉二十周年のクラス会には元

